道徳授業の「落とし穴」⑤
～若年経験者教員のつまずき傾向～

松田 憲子

1．若年経験者教員の道徳授業を参観して

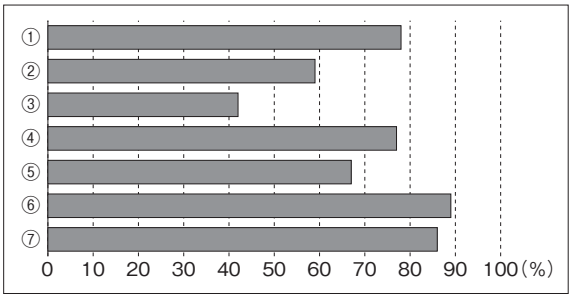
今回は若年経験者教員の「落とし穴」に焦点を当てる。昨年度，道徳指導主事として関わったA市の道徳授業から，若年経験者教員には，道徳授業に共通するつまずき傾向があることに気づいた。32人のつまずき傾向を下記のように分析した。

2．七つのつまずき傾向

つまずき傾向は次の七つに大別された。この中には本欄で紹介してきた落とし穴もある。

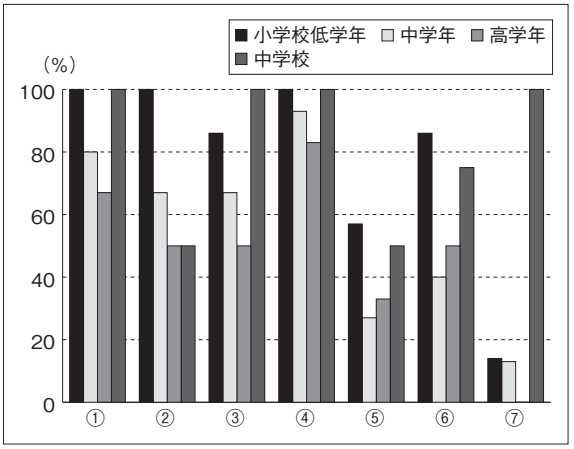
①指導案どおりに流そうとする。
（形式的。発問が羅列的）
②子どもの意見を拾えない。
（つっこみや，問い返しができない）
③「ねらい」への意識が弱い。
（何を目指した授業なのかが曖昧）
④子どもどうしの意見の交流が少ない。
（教師と子どものやりとり中心）
⑤導入が長く，中心発問や終末の時間が足りない。
（頭でっかち，尻つぼみ）
⑥教師の話が長い・多い。
（説明しすぎ。不安の表れ）
⑦ワークシートに書かせすぎる。
（「書かせて発表」の繰り返し傾向あり）

3．自分でつまずき傾向に気づけなかった割合



上のグラフは授業をふり返った際，教員が自分でつまずき傾向に気づけなかった割合を表している。①④⑥⑦は自分自身で気づきにくいことがわかる。別のデータでは，①③⑥は経験を積むごとに気づけるようになるという傾向も見られた。

4．学年や校種ごとの，つまずき傾向



また，つまずき傾向には学年や校種ごとに特徴がある。⑥は小学校低学年と中学校に多く見られた。これは低学年では教師が子どもの発言を繰り返したり，翻訳しようとしたりすることが要因である。また中学校では教師が自分の思いを訴えようとすることで話が長くなる傾向が見られた。

5．これらのつまずき傾向から

①や③のように，若年経験者教員は「指導案どおり」を目指す傾向があるが，経験を積むごとに「ねらい」を意識して柔軟な対応ができるようになってきている。つまり，「ねらい」を意識した授業を心がけることが，子どもの意識の流れを重視した柔軟性のある授業を行うポイントとなる。

そして④は，他教科の指導とも関連する。例えば「似ています」「質問があります」「関連した意見です」など，発言者に対するかかわりをもたせる指導を積み重ねるとよい。子どもどうしで高め合う授業を意識することが，道徳においてもよりよい授業につながるのである。